

# 3 年 生 部 会

## 1 子どもの姿の捉え

3年生児童は、もはや低学年ではない。殊に、筋道立ったものの見方・考え方の成長は著しく、授業では明確な説明や根拠を求める傾向が強い。こうした認知面での発達には、3年生後半での、学習分野別の担任による学習指導の1つの背景ともなっているが、担任も、児童のこうした課題に応えたいと思い、また、そうすることが、児童の学ぶ力を高めることだと考えている。

生活面では、相手の性格や考え方をより理解するようになり、文字通り子どもとして「群れて」遊ぶとともに、学習でもグループで活動したがる傾向も強い。その一方では、相手の性格や、グループの中での態度を批判的に捉え、衝突することも多い。互いに引き合う形で仲良しグループを構成するが、各々は個の世界を持ち、まずは自分の立場で考え、自分自身には甘いという傾向も見逃せない。

担任として、先の論理的な思考の伸長に、集団生活のそうした表れを重ねながら、学習活動や社会生活の中で児童が相手とどう関わりながら成長を遂げていくかの重要な課題があると考えている。

## 2 教師のねがいと手立て

まずは、児童一人一人のものの見方・考え方の形成が大切であると捉え、そのためには、生活や学習で、言葉というものが大切にされねばならないと考えた。自分の思考をまとめ、それを表現する言葉、様々な経験を整理するための言葉、そして、相手に自分を理解してもらい、さらに、相手を思いやる言葉など、様々な場面での言葉を大切にしたい。

児童が学習の中で具体的に関わり合う場とは、話し合いや共同作業の場面である。ここでは、各々の立場が深く関わりあえば関わり合うほど衝突するのは自然なことであると考えた。こうした衝突を伴っても児童が密に関わり合う場を設け、互いに自分の得意な分野を生かした役割の分業が成立することに気付かせていくのが3年生のやり方である。児童は、当初から互いの立場を理解できていたわけではなく、葛藤や試行錯誤の結果、互いの役割が見えてくるに及んで、相互の理解も深まることができた。話し合いや共同作業の場が設けられてこそ、児童は互いに関わる機会を持ち、葛藤や試行錯誤を経ながらも、自分たちの「公共性」を磨くことができるのだろう。

3年生では、夏休み明けに、各々の学年担任が教科担任として各学級を担当するというやり方に切り替えた。各担任の特色を出し、教科色も強まるわけだが、児童は、掘り下げた内容の教科の学習に意欲を示し、自分の得意な分野を一層意識できたように思う。そのことは、互いのやりとりも促す結果となっている。学習上のつまずきもあるが、そこに、教科担任としての工夫も注いできた。

## 3 実践からみた子どもたちの姿

学習活動の中で互いの立場の相違から衝突していた子どもたちも、いつしか収束に向かう。共通の目的や問題意識が発見できたり、グループの作業であれば、各々の役割が見えてきたりするためである。こうした試行錯誤や葛藤を通じて、相手を受け入れられるようになった児童の姿も度々目にしてきた。殆どの児童がグループによる活動を望んでおり、互いの信頼感も増しているようである。

以下、実践例の中で、児童の実態を見ていこう。

## (実践事例1) ことば 劇を作ろう「三年とうげ」

### ① 3年生の子どもたちの「公共性」

本校研究テーマの「公共性」の「違いを排除せず」の大前提となるのが、相手の話や主張をきちんと聞けることであろう。折に触れて話し合いをさせ問題を解決させるようにしている。また自分たちで判断するような場面を多くとるように配慮して、話し合ったことに責任を持たせるようにした。

集会で学年発表をすることになった。学年の委員が相談し、クラスごとに7～8分程度で発表することを考えることになった。そこで、自分のクラスではどんなことが発表できるかを話し合わせた。話し合いの中で「人の話にしっかり耳を傾け、理解しようとする」「物事にあたって客観的に判断し、自分なりに解決しようとする」「友だちの考えを尊重し共に考えを深めあえる態度がもてる」ことをねらいとした。

### ② 話し合いにあたって

#### (ア) 話し合いのテーマを理解すること

委員の子から趣旨が報告される。事前の話し合いの中で可能性のあることを例に挙げていたのでその中からクラスとしての出し物を考える。1組は、音読や劇化を好む。限られた練習時間を考え、これまでの学習の中で「三年とうげ」(光村3上)を紹介したいという意見が多くすんなりと決定した。

#### (イ) 相談する項目を考える

限られた時間でどのように発表するか必要なことを考えることにした。

○配役など役割をどうするか

○体育館で発表するにはどのような工夫が必要か。

○準備することはなにか

これらの課題について、自分たちで考えさせた。3年生ぐらいだとみな活躍したが。最終的には登場人物を多くしたいという意見で、村人を増やしたり場面ごとにナレーターを代えるなど役割を増やしていってできるだけ多くの子どもが活躍できるように工夫していた。また、舞台上になるとせりふが聞こえなくなることもあるので、ナレーターは下にいて音読するようにした。さらに、日が沈む場面では、太陽を傾ける役割も作った。

#### (ウ) 歩きながら考える

練習するといっても実際に体育館を使つての練習はできない。狭い教室でせりふとしぐさを合わせたり、流れを確認することが主になった。教室中心の狭い場所であるため、全体を見通した練習はできなかった。だが、子どもたちは、練習しながら「村人が心配しているようにしたらいい」とか「こういうように言ってみよう」など、いろいろと提案しては、付け加えていく。もともと、教科書の物語を音読するのが目的で始めたので、はっきりと劇にするという予定ではなかった。だが、練習のつどアイデアが出され、修正されていく。練習のたびに登場人物を増やしたり動きを工夫していった。アイデアを出すとみんなで検討に入り「いいねえ」「やってみよう」という積極的な取り組みで、人物にもせりふが増えていき、1組オリジナルの「3年とうげ」になっていった。

### ③ 実践から

司会を中心に話し合いをするとなかなか全員の考えをまとめることができないのが現状である。それほど自己主張が強いのだ。このことは、各自自分の考えをしっかりと主張できる学級風土があるとに通じる。この発表は、「笑ってもらおう」と舞台上上がったが緊張で十分力が出せない子もいた。それでも、みんなで作り上げたという満足感は各自の中に残ったようであった。なるべく多くの子どもが活躍できるようにみんなで考えていったが限られた時間の中では、その他大勢で終わった子どももおり、次に活躍できるような場を用意することが課題であろう。この経験は、音楽会の挨拶の言葉を考えたり、役の子どものせりふに反映された。

## (実践事例2) からだ 「ハンドベースボール」

### ① 「からだ」の時間に見られる子どもたちの様子

「からだ」の時間を心待ちにしている子どもの数はとても多い。心身ともに健康であれば、「身体を動かしたい」という生来的な衝動にかられてじっとしてられないというのが、むしろ自然な子どもの姿であろう。一方、他の学習分野と比べて個人の能力差が見えやすく、集団による活動が多いため、苦手意識や心理的な抵抗感を抱いている子どもも少なくはない。体調不良を訴えて見学を希望する子どもや、転んだりボールが当たったりした程度でも保健室に行きたいと申し出る子どもが、他学年に比べても圧倒的に多い。このような実態を踏まえ、元気な身体だけではなく、丈夫で健康な心、そして、それらを冷静にコントロールできる判断力(頭)を身につけさせたい。

### ② 具体的な手立て

苦手意識を生み出す要因として、経験の有無、経験量の違いが挙げられる。例えば、休み時間の遊び方を見ていると、女子に人気があるのがドッジボールや長縄、男子は野球やサッカーであるが、外で遊ぶほうとしない子どももいる。そこで、経験差を軽減する手立てとして、新しい種目を積極的に扱う、一つの種目をじっくりと扱うなど、授業計画を工夫することにした。また、上手な子どもをミニ・コーチに任命してグループに配属するなど、子どもたち同士で教えあう空気を高めるようにした。

体力面では、年度当初に行った新体力テストの結果で、持久力と投力の結果が思わしくなかったことから、ボール運動に比重をかけた年間計画を立てるとともに、縄とび(3分跳び)を継続的に行うことにした。また、竹馬検定の実施、マラソンカードや縄跳びカードを配布するなど、休み時間など日常的にできるだけ身体を動かすように働きかけた。

遊びとスポーツとの大きな違いは、明確なルールがあるかどうかであり、種目によってはチームプレーを前提としているかどうかにあるだろう。何のためにルールがあるのかを理解し、その上で作戦や役割分担を考えたり、状況を判断したりするなど、遊びからスポーツへと意識化を促す必要がある。

### ③ ハンドベースボールの実践

みんなで野球をしたいという男の子たちからの希望を受け入れ、「ハンドベースボールをしよう」と投げかけると、ボールの扱いになれていない女の子からは「ルールが難しい」「男の子たちがやらせてくれない」などといった不満の声が挙がった。話し合いの結果、遊びとしてではなく授業として行うのであるから、「みんなが楽しく参加できて、それぞれに力をつけられるようにチームで工夫・協力する」という目標を立てた。また同時に、ボールを貸し出し、苦手だと思ふ人は家でもキャッチボールの練習をしたりTVで野球を見たりしておく、よく知っている人はきちんとルールなどを教えてあげる、といった課題を出すことになった。

男女ペアのキャッチボールやチームごとの守備練習の場面では、男の子がボールの取り方や状況に応じた守備位置を確かめながら教える姿が見られるなど良い雰囲気であったが、試合の場面では、ボールを投げ当てられたランナーはアウトかどうかで紛糾したり、試合に負けて不満を漏らしたりする姿などが見られた。少人数で行う際に便利な約束と大人数で行う際のルールとの違いについて、また、勝負を採り入れる意味や身体を動かす楽しさについてなど、振り返って考える学びの大切さを感じた。

#### 4 公開研究会での授業提案や協議会を経て

##### (1) 部会として授業改善のために目指したことや、そのための手立て

自己中心に傾かず、責任感や連帯感を高めて、ともに学び合える学習集団の形成とともに、それぞれの学習分野別の授業における学力の伸長を目指した。

以上の目標に近づくために、生活や学習全般において、児童個々の見方・考え方の密な交流を図り、互いに相手を理解する機会を多く持つようにするほか、生活や学習の場面で、自分自身の役割を持ち、それを積極的に果たすことを重要視した。また、学年担任が、各々学習分野別の担当して、学年全体の学習指導に当たることにより、より、学習指導の工夫に力を注いで、児童の要求に応えられるようにした。

##### (2) 具体的な成果や問題点

児童の間の信頼感や連帯感が増し、学校の決まりを互いに守ろうとする空気も生じた。また、学習の話し合い活動も、互いのやり取りが活発になり、みんなの問題を、全員で討議することができるようになった。反面、連帯感が、学級単位に凝集する傾向もあり、各々の児童が、学年全体に対する責任を自覚して、さらに広い社会の一員としての意識を持ちたい。

学習面では、論理的な思考の伸長が顕著で、どの学習分野でも、筋道立った説明を求め、学習分野別の担任による授業を、強い興味・関心とともに受け入れている。

##### (3) 協議会での話題・意見・質問など

- ・「ことば」の学習において、児童が自分で問題を作っていたが、全員で問題を作る場合の難しさはどんなことか。
- ・児童の話し合いにおける平行線は、教師がどのように解消するのか。
- ・算数における公共性とはどのようなものか。
- ・附属小学校の児童は、等質集団ではないか。（以上、参会者からの質問・意見）
  
- ・「公」は、背景に権力を背負った概念だが、「公共」は、市民・公開・共同・多様・討議を特色とする、開かれた概念である。
- ・シチズンシップには、知識・価値・技能という3つの側面があり、例えば、技能には、探求やコミュニケーションの技能や、聞く力、それに明確な指示をする力などが含まれよう。
- ・附属小学校は、複数の教師による専門性を生かし、学習分野別の多面的な眼で、異質な集団の交流を図りながら、公共性を育もうとしている。（以上、水山先生と小玉先生の指導）

##### (4) 協議会を経て、今後の課題であると認識したこと

公共性の要件を、知識・価値・技能という3つの視点を明確にすることによって、明晰に分析して指針がつかめるのではないだろうか。そのことがまた、シチズンシップのリテラシーのあり方を洗い出すことになり、公共性に関して、各学習分野別の学習指導での具体的な成果を上げることにもつながるのではないかと思われる。